

ニホン語かニッポン語かジャパン語かジャパニーズ語か



What's in a name?

よしおかのぼる
吉岡 乾

民博 人類基礎理論研究部

世界では今、大小合わせて数千もの言語が話されている。

この『月刊みんぱく』の原稿が書かれているのは、「日本語」だ。日本の義務教育で学ぶ異言語は「英語」だけ……ではなく、古典の授業で習った『万葉集』などの「上代日本語」「土佐日記」などの「中古日本語」「徒然草」などの「中世日本語」なんかもある。漢文の授業で扱ったのは、「中期中国語」とでもよべる言語であった。国名が付いている言語名も多く、「ドイツ語」「フランス語」なんてのは大学で学んだ人も多いことかと思ふ。一方で「アラビア語」「アイヌ語」などを考えると、言語名に用いられるのが国名だけではないのだということも、すぐにわかる。

二〇一五年四月二日に日本では、グルジアとよんでいた国の名前をジョージアと言い換えるようになった。「グルジア」はロシア語、「ジョージア」は英語由来の名称であり、ジョージアからの要請を受けてポリティカル・コレクトネスのために換えたというのだが、何故ロシア語は不適切で英語が適切だというのが不明瞭だと個人的には思えた。公用語のグルジア語での自称国名は「サカルトヴェロ」(“*Sakartvelo*”)なのに、何故英語を優先したのだろうか。ともあれ、国名は変わったが、「グルジア語」という言語の和名は依然として使われ続けている場面が多く思える。同じ概念を指す以上、定着している用語を守るとするのは、通時的に一貫して物事を考えていくうえで大切な工夫だろう。

定着ということでは、筆者の研究している言語の「ブルシヤスキー語」という名称もだ。本当ならば「ブルシヤスキ」と語末を短く発音するのが自称なのだが、英語などで“*Burshas*”と綴られると長短が区別できず、周辺に「ヒンディー語」(“*Hindi*”)「パンジャービー語」(“*Panjabi*”)などと、*u*で綴られて「イー」音で終わる自称の大言語があった所為であろうか、予てより和名が「ブルシヤスキー」となってしまうていた。

「パンジャービー語」は「パンジャーブ語」ともよばれる。「パンジャービー」が「パンジャーブの」という意味だからである。「ヒンディー」も語源的に「ヒンド」(“*Hind*”)「インド」(“*India*”)の「」という意味だが、「ヒンド語」などはよばれていない。何故だ。

調査対象には「ドマーキ語」とよんでいる言語もあり、これもじつは、何とよぶかが悩ましい。今ではほとんどふたつの集落にしか話者が居ないのだが、方言差があり、片方は「ドマーキ」、もう片方が「ドマー」と、自称言語名が異なっている。しかも、前者は周辺優位言語であるブルシヤスキー語的な名称、後者は周辺優位言語であったシナー語的な名称で、本来の自称が(あったとしても)失われてしまっているので、なおさらどちらに軍配を上げるのにも決定打が足りていないのが実情である。研究者たちが「ドマーキ語」とよぶのは単に、一九三九年に初めてされた研究がそちらの方言を扱い、その名称 (“*Dumaki*”) を採用していたからである。

さあ改めて、“*Japanese*”は何とよぶべきだろうか。